8月5日
感　想

原水爆禁止広島大会フィールドワーク

バスツアー「安野発電所への中国人強制連行・中国人被爆の歴史を歩く」に参加して

新美 彩子

父が西松建設裁判の弁護団に関わったご縁で、継承する会事務局長の川原洋子さんと西松安野友好基金の運営委員長である内田雅敏弁護士からお声をかけていただき、昨年 10 月に行われた「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」に参加をさせていただきました。川原さんや岡原美知子さん等、広島のスタッフの方々から温かい歓迎をしていただき大変感激しました。何より、河北大学の劉宝辰元教授、天津外国語大学の修剛学長、受難者の邵義誠さんのご家族である張振侖さんら中国から来日されたお三方との出会いも感無量でした。そして毎年 8 月に原水禁広島大会のプログラムとして安野でフィールドワークが行われることを知り、是非自分の目と足で安野の地を辿りたいと思い、再び今夏、広島を訪れることにしました。

平和公園からバスで現地へ

8 月 5 日のフィールドワーク当日、平和公園資料館前からバスで出発しました。

安野に向かうバスのなかでビデオ『50 年目の叫び～広島・安野への中国人強制連行の真相～』を観ました。1992 年、川原さん達の市民団体が現地調査のため訪中し、生存者や遺族から聞き取りをしていく足取りを追ったドキュメンタリーです。安野での過酷な労働と生活環境で身体機能が衰え、回復不能な怪我を負った方、原爆により亡くなった方の遺族の慟哭、被爆の影響か歯茎の癌になり撮影直後に亡くなった方、映像が流れた車内は重い空気が漂いました。

今回のフィールドワークは全国から 18 名、地元・安芸太田町から 2 名の方が参加しました。比較的若い方が多かったのが意外でした。私のように東京、神奈川の関東圏からも多く来ていました。なかには広島を初めて訪れる方もいて、「広島と聞くと原爆のイメージしかなかった、中国人強制連行そのものもあまりよく知らない」という参加者もいました。「広島」「原爆」といえば、映画『この世界の片隅に』では呉が物語の舞台でしたが、呉からわずか 50 キロ先にある安野の地で、360 名の中国人が強制連行され発電所建設のために過酷な労働を強いられたと、いったいどれだけの人々が知っているでしょうか。そのうち 17 人が被爆し、うち 5 人が被爆死していることを日本人のみならず中国人も知る人は多くないのかもしれません。

「安野 中国人受難之碑」

善福寺でのトイレ休憩を経て、バスは中国電力安野発電所前に到着しました。安野中国人受難之碑まで歩きます。強烈な太陽光と暑さに一瞬眩暈がしましたが、受難之碑の凛々しい佇まいが目に入ると何故だか自分の歩みに力が入ります。昨年 10 月に初めてこの地を訪れた時は冷たい小雨が降っていてとても寒かったのを覚えています。今回はそのときの雨に濡れそぼった灰色の受難之碑の面影と全く違っ

安野 中国人受難之碑

ていて、夏の光を受けて堂々と輝いていました。黄緑の草草の上にすっくと立ち尽くした青年のカッコよさを纏う碑なのです。碑にはそれぞれの土地と歴史と現地の人々の思いがあり、それぞれの顔と姿形があるのでしょう。安野の碑は、中央の主石碑の高さが連行された中国人の数 360 名にちなんで 360cm、主石碑の両側には 360 名の名前が刻まれていて、その土台の高さが 29cm で日本で亡くなった 29 名にちなんでいるとのことです。石は中国福建省から運び込まれたもので、碑の揮毫は中国人の遺骨をあずかっていた善福寺の藤井慧心住職によるもの、刻まれた全ての文字は中国語と日本語が併記されていて、強制連行の歴史事実や和解までの経緯、日中友好を願う思いが彫られています。細部の細部まで考え込まれた仕掛け、平和と友好を願う思いに溢れた造り。ついつい誰かに伝えたくなってしまいます。こういう気持ちにさせてくれる安野の碑に一人でも多くの方が訪れてほしいと願ってやみません。

安野発電所

碑を前にして安野発電所を望みつつ、川原さんの説明を聞きます。安野発電所は、戦後完成した 1 号と中国人と朝鮮人が建設した 2 号の 2 基の発電機で発電していて、現在も広島に電気を送り出しているとのことでした。

貯水槽まで長い階段を汗を拭き拭き上っていきます。当時の写真と今の情景を見比べながら、中国の方々が見ていたであろう景色と今とではどのくらいの変化があるのか想像を巡らします。貯水槽から眺める中国人収容所は今は跡形もありません。中国電力の職員の方から発電所の仕組みや機構について説明を受けます。安野発電所は、土居取水口で滝山川の水を山の中にある導水トンネルに引き込んで、およそ 8 キロ先下流のここ坪野で 65 メートルの落差を利用して発電する水力発電所だということです。そして川原さんからは、中国から拉致されて連れて来られた 360 名の中国人の方々はこの 8 キロの導水トンネルを掘る際に出た石運び、発電所の基礎工事、取水口建設工事のために川の中から石を運び出す作業などをしたということ、現場では日本人の監督下で、技術や経験がある朝鮮人が機械やダイナマイトを扱い、中国人は素手で重い石をトロッコに積み、トロッコを押してトンネル外へ運んで捨てる、まさに「下働き」をさせられた、といった安野での強制連行の概観を説明していただきました。

善福寺で学習

お昼前、善福寺内での学習会です。今回、参加者に配られた冊子には強制連行問題の背景説明から安野での強制連行の実態、西松建設との和解までの経緯がとても丁寧に記述されていて、ここだけの配布では勿体ないと思いました。まさに「歴史事実を継承する会」の名に応じた充実ぶりです。

川原さんから補足説明があり、1953 年から始まった遺骨の収集風景と中国に送還された様子を映した記録映像も上映されました。

当時、遺骨 5 柱を安置していた善福寺の藤井住職のお話もありました。昨年 2017 年に天津の「在日殉難烈士・労工紀念館」で西松安野友好基金の和解事業として行われた追悼法要で読経されたこと、日本から送還された遺骨が紀念館でどのように安置されているのか、そして受難者のご遺族との言葉こそ

パネルを使ってお話する藤井慧心住職

通じないが心と心の通い合った触れ合いがあったこと、ご遺族たちは紀念館を訪れたことで一つの心の区切りとしていたようだったといったことをお話しされました。そして、「人としての心の優しさがすべ

ての基本である。安野のことを知ることは人間らしく生きること。人は人に出会い、人になる」という言葉がとても印象深く心に残りました。

栗栖薫さんの証言

次に、この猛暑のなか 88 歳という高齢を押して広島市内から来られた栗栖薫さんがお話されました。栗栖さんは 1956 年まで香草に住んでいて、その自宅は中国人収容所からトンネル工事の現場までの道路沿いにあり、当時 15 歳だった栗栖少年は自宅の

証言する栗栖薫さん

前を朝に晩に往復する中国人の姿を見ていたということでした。父の数夫さんが中国人収容所の監視員をしていたことから、栗栖さんも収容所に行くことがあり、目の当たりにした当時の様子を語ってくれました。参加者には、香草中国人収容所とトンネル工事現場と栗栖家の位置関係が一目で分かる見取り図が配られました。収容所の俯瞰図もあり、これは栗栖さんが裁判で提出し、証拠として採用されたそうです。100 人の中国人が昼夜二交代で 12 時間労働をしていた拠点であった収容所は板を打ち付けただけで、出入口がただ一か所のみで窓が一切なく、寝床と便所と炊事場に仕切りはない物凄い乱暴な作りになっていたとのことです。栗栖さんはあたかも昨日の出来事のように臨場感のある語り口で、こちらは見取り図を見ながらあれこれと想像を巡らすことができました。食べ物は握りこぶし大のマントウが唯一つであったこと、そのマントウは地元の小学生が拾ったドングリを軍事用に搾油した残りのカスで作られた粗末極まりないものであったこと。着る衣服も地下足袋もボロボロで、裸足の人もいたこと。栗栖さんが描いた導水トンネルから外にトロッコの軌道が延びている絵も見せていただきました。やせ細ってとぼとぼ歩く中国人や病気で動けなくなった中国人の姿を栗栖さんは今でも忘れることができないといいます。当時 15 歳だった栗栖さんと同世代の 10 代の若い中国人もいたというから驚きです。安野の生き証人である栗栖さんの言葉はとても貴重であり、この証言を聞いた私達の責任も重くなった気がしました。

津浪・香草

午後のフィールドワークは、津浪中国人収容所跡地・掘出し口跡から始まりました。安野強制連行の特徴である、労働現場・収容所と地元民家が近接していることを実感できる場所です。中国人収容所の跡地は今は田圃となっており、その周囲は民家が立っています。バスの中では川原さん自らが試行錯誤を重ねて聞き取りをした当時を知る地元住民の証言の数々が披露され、参加者一同興味深く耳を傾けていました。

バスは香草中国人収容所跡へ向かいました。鳥居をくぐり大元神社までの参道はゆるやかな坂になっていて、猛暑のなか少し歩くだけでも汗が噴き出します。参道脇は杉の生い茂る林で、かつてここに中国人収容所があったとの説明ですが、今は全く窺い知れないほど鬱蒼としています。まさかこんな斜面に建物を建てないだろう、きっと当時は土地をならして収容所を建てたのだろうと思いましたが、それは甘い考えでした。木造平屋の収容所は土地の傾斜に沿って斜めに建てられたと聞き、思わず絶句。そのことだけでも中国人に対する待遇が想像に難くありません。この香草収容所にいてトロッコ事故に遭

い、失明した宋継堯さんは、戦後 50 年経って再びこの場所に立ったとき、収容所の前の参道に大きな銀杏の木があったと仰られ、息子さんに手を引かれて銀杏の木に近寄りその幹を優しくさすり大きくうなずいたといいます。今は、その銀杏の木は根本から切られ、切り株は黒いシートで覆われていました。宋さんがいつまでも覚えていた銀杏の木がなくなっていたことが、まるで歴史の一証人を失ってしまったような気がしました。

バスは香草収容所から太田川に沿って約700メートル先の香草工事現場に向かいます。トンネル口は今はもう無いのですが、トロッコの軌道は現在はアスファルトになっているだけで、下り坂から右に曲がるカーブは今でも確認できます。前述の宋継堯さんは、まさにこのカーブで事故に遭いました。宋さんの証言は『西松安野友好基金和解事業報告書』に詳細に掲載されていて、この事故については特に詳しく述べられており、事前に読んでいたのでどんな場所なのか想像をしていたのですが、思っていたより道幅は狭くカーブの曲線も急でした。当時の簡易なトロッコで、このカーブを曲がり切るのはなかなか大変だったろうと思います。スタッフのガイドによれば、当時、土砂や捨てられた石でガタガタしていたこの路面上にトロッコの軌道を次々に延長していくので走行が非常に不安定であったとのこと。宋さんが乗ったトロッコは下り坂で勢いがつき相当なスピードになってブレーキがきかず、脱線して崖下に転落したのです。

トロッコ事故で両目を失明した宋継堯さん
（1994 年 5 月、山東省莱陽市。2010 年死去）

フィールドワーク参加者の中から「こんなにも川が近いのになぜ宋さんは川へ行って目を洗えなかったのか？」との質問が出ました。確かに数十メートル先に太田川が流れているのが見えます。宋さんの証言に、転落後、顔は血だらけになり目には大量の砂が入って目を開けることができなかった、とあります。後から来た同胞が、倒れている宋さんを見つけ、トンネルから流れ出た泥まじりの水で（！）目を洗ってくれたそうです。しかし同胞たちも作業の手を休めると叱られるので宋さんの目は放置された、と。そして宋さんは失明してしまいました。現代を生きる私たちの発想であれば、あそこの太田川に行って目を洗おう、という選択肢があるのかもしれません。しかし、宋さんの証言にはどこにも太田川の文字はありません。今の常識では推し量ることもできない、想像をはるかに超えた壮絶な現場が 73 年前のここにはあったのです。「なぜこんなことも、あんなこともできなかったのか」とつい戦時中の人間の行動に歯がゆさを感じてしまいますが、「こんなことも」「あんなことも」全く不可能にされてしまうのが「戦争」であることを今一度受け入れるしかないのです。私たちはただひたすらに当時の証言を聞き、当時の現場に足を運んで、自分の常識の範囲内で価値判断することの無意味さを思い知るしかないのかもしれません。

土居取水口

バスは、加計警察署（現在は山県警察署）を横目に眺めながら（昼の学習会で川原さんから言及があった「国防保安法違反事件」や「大隊長・３班長殴打致死事件」で逮捕された中国人達がここに留置されたとのことです）、最後のフィールドワーク先である土居収容所跡へと向かいました。土居収容所跡地は運送会社の横の空き地だと説明されました。当時を思い起こすものが全くありません。バスを降り、反対岸の土居取水口へと歩いて移動します。土居取

水口では、安野発電所でもレクチャーしていただいた中国電力の職員の方から取水口の基本的な設備についての説明がありました。その際に、この日の安芸太田町の午後の気温が 38 度であることも知らされ、参加者一同、驚き顔。

1944 年撮影の土居取水口工事写真を見比べながら、現在も遺構として残っている穴の天井部を確認して、滝山川を眺めました。受難者の邵義誠さんは一日中、川底の石を抱えて運び、トラックに積み込む作業をさせられていたといいます。少しでも作業が遅いと崖上から監視が下りてきて棍棒で殴られたともあります。川の水ですっかり浮腫んだ足は棒のようになって寝床にさえ上げるのもままならなかったとも。その邵義誠さんが今年の 6 月に 92 歳でお亡くなりになったと川原さんから報告がありました。群青色の川面を渡る風に吹かれながら邵さんの労苦を偲び、ご冥福を心からお祈りしました。邵さん達、第 4 中隊 63 名が石を運び出し堰堤を築き上げた労苦があって今の滝山川の満々とした流れがあり、その流れは取水口へ注ぎ込みます。香草の第 2 中隊と津浪の第 3 中隊の 200 名が掘った導水トンネルの中を今も水は流れ、坪野の第 1 中隊の 100 名が築き上げた水力発電所は今も電気を供給しているのです。過去は過去のものとして分断されるのではなく、360 名の中国の方々がおこなった仕事は現在を生きる日本の私たちの光となって生き続けています。

参加者から、この導水トンネルはいつまで使用できるのか？と質問がありました。中国電力職員の回答は、半永久的である、とのコメントでした。およそ 8 キロの導水トンネルがいつまでも安野の地に残り続け、戦中の加害の事実を私たちに語り続けてくれるのかもしれません。

おわりに

折しも広島を訪れる前、杉田水脈衆議院議員の「ＬＧＢＴは生産性がない」という発言が世間で大きな物議を醸していました。「生産性」という大義名分で、国内の労働力不足を補うために中国人を拉致して強制的に働かせ、使い捨てにした当時の政府と杉田議員の発想の根幹は同じです。人間を「生産性」という言葉で線引きし、差別し、人を人として見ない権力者の身勝手な傲慢さ。「心の優しさがすべての基本。安野のことを知ることは人間らしく生きること。人は人に出会い、人になる」。善福寺の藤井住職の言葉を今一度噛みしめてみたいと思います。70 数年前、中国の地から無理矢理連れ去られて来た 10 代から 30 代の働き盛りだった“お兄さん達”を自分の家族や友人や仲間だと感じることができたら、「生産性」や「労働力」という言葉で彼等のことを切り捨てたり、無関心でいたりは決してできないはずです。今からでも遅くはない、“お兄さん達”に時を越えて手を差し伸べ、心を、声を、安野の地に届けることができたら。それは、どんな人にも分け隔てなく優しかった父の望みでもあると思います。

16 時半、バスは予定通り平和公園に到着し、フィールドワークは終了です。とにかく暑いこの夏、スタッフからは熱中症予防のため徒歩での移動や炎天下での説明を極力避け、説明はバス内や善福寺内で行うという配慮があり、お茶やスポーツドリンクの提供、水分補給の呼びかけ、休憩の確保など痒い所に手が届く心配りと配慮に恐縮しきりでした。川原さん、岡原さんはじめスタッフの方々に心から感謝いたします。おかげさまでフィールドワークに集中し、実り多い学びと経験を得ることができました。

＜新美隆弁護士について＞

新美彩子さんのお父様は新美隆さんです。

西松建設裁判の控訴審で弁護団長を務められ、広島高裁判決を勝訴に導きました。高裁勝訴判決が最高裁の付言を引き出し、付言は西松建設が問題解決へと舵を切る拠りどころとなって、和解成立に至りました。ご病気のため 2006 年 12 月に逝去され、和解に立ち会っていただけなかったことは残念でなりません。